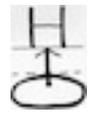


さくら通信



Hoju
Group
宝樹会

No.16

2019

宝樹会によるウィーン発の浄土真宗会報誌

道を求めるころ (13)

道を求めるころ (その2) 3

岡本英夫

海の徳としての如来の徳



功德雲比丘 (くどくうんびく) は、第三の善知識である海雲比丘 (かいうんびく) を紹介します。海雲比丘を訪ねていく歩みの途上、童子は功德雲比丘から聞いた教えを振り返り、しっかりと受けとめていこうとします。

海雲比丘は12年ものあいだ海を眺めている人です。この善知識に童子は尋ねます。

「私は既に真実を求める心を起こしました。一切の智慧の大海を渡っていきたく思います。しかし、どのようにすれば智慧の大海を渡ることができるでしょうか」

大海を渡るということで、不退転 (*1) を得、魔を降伏 (ごうぶく) し、執着を超え、衆生を救っていく、などの意味を表している。まさしく仏道の全内容の成就を願っているわけです。

海雲比丘は、自分が見続けた「海」の何であるかを童子に説きます。海の色が変わるのは何を意味するのか。どのような大きな魚がいるのか。どうして大量の水がある

木のもとのお話(16)

他力本願と自力

「自力」とは単なる自分の心
というのではなく
阿弥陀の本願を受けとめず
自分の力を過信して、
自分の力で自分を救うことが
できると思う心です。
例えば、瞑想や肉体による
修行や禁欲主義等によって
自分の力で救われようとする
心です。

のだろうか。なぜ雲が覆っているのか、など。それら比喩的な表現をもとにして、海は如来の世界であり、如来を海として表したのであることを説きます。

師と弟子一体の世界

第四の善知識は善住比丘（ぜんじゅうびく）です。この師から「無碍（むげ）の法門（ほうもん）」を学びます。自ら何ものにも障（さ）えられず、すべての人の心を見ることができ、何らのこだわりや隔てられることなく生きることができるのであります。

続いて第五の善知識は医者である弥伽（みか）です。訪ね当たると弥伽は万人の大衆に取り巻かれ、獅子の座に坐り、教えを説いている最中でした。この弥伽に童子は尋ねる。まずいつものように「どのようにして菩薩の行を学ぶべきであるか」。さらに加えて、

「どのようにして生死（しょうじ）の中において菩提心を失わずに歩いていけるでしょうか。どのようにすれば堅固（けんご）正直（*2）の心を得て、世間に壊されなく歩いていくことができるか。もろもろの弁力（べんりき）をさとして諸法（しよほう）の真実の蔵（くら）（*3）を分別（ぶんべつ）して説くことができるでしょうか。」

このように申し上げた童子に対し、弥伽は「汝は真実を求める心を本当に起こしたのか」と尋ねます。これに対して童子が「その通りです。既に起こしました」と答えた時、大衆に取り巻かれている弥伽が、その高座（こうざ）から飛び降り、五体を地に投げ出して、童子に最敬礼をしたのです。

のみならず、華を散らし、宝の珠を捧げ、香（こう）を焚（た）き、着物までも捧げた。善知識が童子に対して敬虔（けいけん）に供養（くよう）（*4）をしたのです。師は弟子の上に「真実」を見たのです。師の心の中には、もはや師も弟子もない。ただ如来ましまし、大法（*5）が光り輝くのみなのです。（続く）

(*1)不退転...仏道の歩みにおいて退転せず、進み続けることができること。（*2）堅固正直...自らの心のままに歩いて、何ものによっても壊されないこと。（*3）真実の蔵...無限に広く深い仏法という真実の教え。（*4）供養...本来は自分の身を仏に捧げること。それを象徴する意味で花や香を焚き、ものを捧げること。（*5）大法...真実の法。真実の教え。

